
神のお遊戯

もなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神のお遊戯

【Nコード】

N4900J

【作者名】

もなか

【あらすじ】

——目が覚めたら、とつてもメルヘンチックな部屋にいた……。
——僕”こと笹川夏樹はゲームに参加する人間として、自称神様のゴスロリ幼女に選ばれた、らしい。元の世界に戻るためにはそのゲームから生き残らないといけないらしくて……？***けっこー何でもありのファンタジー。一応主体は超能力で***

*序章 メルヘンな夢

——目が覚めたら、とってもメルヘンチックな部屋にいた。

え、何コレ。

”僕”ささがわなつきこと笹川夏樹は良くわからない状況に陥っていた。

スゴくふかふかなベットは気持ちいいんだけど、どこからどう見ても僕のベットじゃないよね？

こんなウサギやクマが散りばめられた可愛い柄は僕のベットじゃないよね？

ふと辺りに視線を向けると、可愛いクマやウサギのぬいぐるみ達がパタパタと忙しく動いていて、高そうで豪華な家具がフワフワと浮いている。

「気がつきました？」

下から聞こえた声に視線を向けると、右耳にピンクのリボン、口元は罰点到縫われていて目はボタン、全体的にピンクなウサギさんが僕に話しかけてきて……。

よし、把握した。

僕はとつてもメルヘンな夢を見てるらしい。

どっちかといえば、子供の頃は戦隊モノの方が好きだったはずなんだけどなあ。

「あ、何か食べます？ お腹空いてませんか？」

「……じゃあ、トーストって出来ます？」

言われてみたらお腹はペコペコ。

朝食はきっちり取る僕にとって、トーストは欠かせない。

そのまま食べるのも良いんだけど、やっぱり焼くのがベスト。

そこにたっぷりのハチミツとバターを塗るのが夏樹流。

熱い内に塗れば、溶けるようにハチミツとバターが絡み合って……

…お腹空いたあ。

いつまでたつても動かないウサギさんに僕はむむむ…と口を尖らせていけば、香ばしい食パンの良い匂いが漂ってくる。

途端にたったり、と涎を垂らしそうな勢いで口を開けた僕に、にっこりとウサギさんが笑んだような気がした。（実際は罰点の口をもぐもぐ動かしたただけなんだけど）

「何をお塗りになりますか？ あと、お飲み物のほうは？」

「ハチミツとバター！ 飲み物は牛乳でお願いします！」

布団から出た僕は、待ちきれずに床を足でパタパタと叩く。

僕の膝丈より少し上のウサギさんは、僕に合わせるようにぴよぴよこと跳ねていた。

しばらくしてフワフワと浮かんできたお皿とコップに、僕は待ちき

れず立ち上がった。

途端に豪華な彫りが施された机と椅子が滑り込んでくる。
カチャリ、と最小限の音を出して、僕の愛すべきトーストが机の上で着地した。

椅子がつつつ…と勝手に動いて僕を座るように促す。

僕はよいしょ、と腰を下ろして、その座り心地に驚いた。
どうやら見かけだけじゃないみたいだ。

ふわっと沈むようなクッションに、肘掛は滑るようにツルツル。

食器はアンティークのような凝ったデザインだし、ここにいるのはお金持ちみたいだ。

……って、夢の中なんだし誰が居ようと関係ないかあ。

遅れて浮いてきたハチミツとバターに……それを塗るやつ。（名前忘れた）

着地するより先に近くに來た瞬間、僕はひょいっと掴んで蓋を開ける。

ハチミツの良い匂いが漂って、僕は堪らず人差し指を突っ込んで舐めた。

あ、ハチミツは僕の家にあるやつと同じだ。

……どうせなら食べ物にお金掛けて欲しいなあ。

内心ガツカリしながらも、夢なんだし贅沢は言えない。

バターから順に塗って、ハチミツはたっぷり塗りたくる。

家じゃ塗れない贅沢な塗り方にホクホクしながらも、僕は堪らずトーストに齧りついた。

……めちゃくちゃ美味い。

ハチミツとバターのハーモニーが僕の口内で踊る。

食パンの焼き加減とかジャストミートだ。
是非焼いた方にお会いしたい。

黙々と食べつつも、味もわかるなんてリアルな夢だなあ…と
僕が口からつい言葉がついた。

「夢じゃなかったらいいのに……」

ピタリ、と世界が停止した……ような気がした。
実際には一瞬、忙しく動いていた物が止まっただけで、今じゃさ
つきと同じだ。

気のせいかな？

僕は少し首を傾げて牛乳を流し込んだ。
すっかり綺麗に無くなったお皿を見て、僕は涙が出そうになる。
するとフワフワと浮かんで離れていく食器、バター、ハチミツ。
離れていく友に涙は見せまい、と僕は唇を噛んで大きく手を振った。

「お腹は膨らんだかしら？」

鈴の音のような綺麗な声が響いた。
すかさずウサギさんに視線を向けるが、ぶんぶんとき切れそうなく
らい否定してるから違うらしい。

「ご主人様でございます」

「……ご主人様？」

……めんどくさい夢、色々と設定があるのかなあ。
だとしたら僕、もう帰りたいんだけど。

「私を無視するとは良い度胸ね、笹川夏樹」

「いや、無視するつもりはなかったんだよ？ どこから聞こえたかわかんないし、返答に困って……——」「言い訳無用！ さつさとこっちに来なさい！」

うーん、ワガママ姫って感じ？

僕、正論言ってるんだけどなあ……。

ふと周りに視線を向ければ、ぬいぐるみ達があわあわと慌てている。何とも珍しい光景に、僕は薄っすらと笑みを浮かべて……

「さつさと来なさい！！！」

了解です。

どこの誰かはわからないけど、すっかり機嫌を損ねちゃったらしい。それにさらに大慌てし始めたぬいぐるみ達はわーわー言ってる。

もうちょっと座って眺めときたかったけど、これ以上機嫌を損ねさしたらぬいぐるみ達が泣き出すかもしれない。

……あ、ちよつと見てみたいかも。

でも怒られるのやだしなあ……しょうがない。

のんびり席を立った僕に、背後からバンツ！と乱暴な音を立てて扉が開く音がした。

相当ご立腹らしい。

僕、そんなに怒らせるような事してないけどなあ？

くるりと振り向けば案の定、やたら大きい両扉が開いている。
こんなところに扉があったなんて気づかなかった僕は、少々驚きながら歩き始めた。

——この夢っていつ覚めるんだろう？

ふとそんなことを思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4900j/>

神のお遊戯

2010年10月28日04時44分発行